

情報の参照

論文の執筆では各種の情報を活用する事が必要不可欠ですが、それにはルールの順守が求められます。不適切な形で情報の使用は重大な問題と見なされるので、注意して下さい。

A. 出典の明記

参照する情報は、その出所を明確にしておく必要があります。書籍ならば本の題名や著者、出版社や発行年など。HP であっても作成者・URL が必要です。

これらは論文においては「reference」セクションにまとめられる事になります。その形式については当シンポジウムの書式を良く確認して下さい。

B. 本文中での参照方法

情報の参照と一口に言っても、本文における形式にはいくつかの種類が存在します。それらを概括します。

a. 長い引用

ある程度以上の長さ（明確な規定はない）の参考文献上の本文をそのまま使用したい場合は、インデントではっきり区別できる形で抜き出します。以下はその実例です。

・・・例えばこのようにして、前後のインデントが本文とはっきり異なるようにして、参考先の本文を用います。また、前後の本文との間には改行を入れます。

引用操作においては、文章の変更・改変は一切認められません。一字一句が引用先と同じになるよう、注意して下さい。（仮名, 2012 [3]）

最後に著者名、発表年、番号を記入するのを忘れないで下さい。論文全体の末尾に参照文献はまとめますが、本文においても記述が必要です。英語論文における表記方法は、書式を参照して下さい。

b. 短い引用

上ほど範囲が長くない場合は、本文中で「”」を用いて引用します。改行やインデント付けは行いません。例えば以下のようにします。短い引用においても、” 文章の変更・改変は一切認められません。（仮名, 2012 [3]）” 引用元がどこか、分かりましたか？

c. 要約

引用と異なり、要約においては論文執筆者が元の表現を変更できます。ただしその改変は元々の趣旨を歪めるようなものであってはなりません。限られたスペースで、必要な情報だけを抽出して利用するための方法です。

文章としては本文の筆者に帰属するため、ことさら目立つ表現上の区別は行いません。多くの場合、「〇〇は著書××の中で以下の事を述べている…」というように、本文に入れ込む形で出典を表記します。

いずれにせよ、論文における情報の使用は「出典を明記する」事が大前提です。元となる情報を収集・発表した方々に敬意を持って、情報を扱って下さい。